日本橋常盤小学校における「まちづくり学習」 の授業効果の持続性 —授業実施5年後のパネル調査—

柳沼 葉子¹・市川 健太²・岩倉 成志³・野中 康弘⁴

¹正会員 株式会社道路計画 技術部 (〒170-0013 東京都豊島区東池袋2丁目13-14マルヤス機械ビル)

E-mail: y_yaginuma@doco.co.jp

²正会員 独立行政法人鉄道・運輸機構 鉄道建設本部 (〒920-0858 石川県金沢市木ノ新保町1-1)

E-mail: ken.ichikawa@jrtt.go.jp

³正会員 芝浦工業大学教授 工学部土木工学科 (〒135-8548 東京都江東区豊洲3丁目7番5号)

E-mail: iwakura@sic.shibaura-it.ac.jp

⁴正会員 芝浦工業大学連携大学院客員教授 (〒135-8548 東京都江東区豊洲3丁目7番5号)

E-mail: y_nonaka@doco.co.jp

2004 年度に日本橋常盤小学校 5 年生を対象に実施した 50 コマに及ぶまちづくり学習の授業効果について、その児童が高校 2 年生になった時点での授業効果の持続性を分析するための追跡調査を実施した。調査対象者は、授業を受講した児童と保護者、小学校教員、さらに当時授業を受けていない上級生とし、まちづくりに対する関心の比較を試みた。

この結果、受講した児童の半数以上が現在もまちづくりに関する関心を有していること、大学生や地域住民などの外部協力者が授業効果を有効に高めること、1 つの題材の授業を連続的に長期間実施することが有効であることが明らかになった。

Key Words : *project based learning, community planning, elementary school, sustained effects*

1. はじめに

まちづくり学習を小学校教育に取り入れた事例が、近年数多く報告されている^{1),2),3)}。学校教育においては、1999 年に「全国子どもプラン(緊急 3 ヶ年戦略)」が策定され、地域で子どもを育てるための環境の整備も進み、「デザインゲーム」¹⁾や「まちワーク」²⁾、「都市環境学習」³⁾といった学習が行われるようになった⁴⁾。また、2002 年度に小・中学校の学習指導要領が改訂されたことに伴い、小学校 3 学年から 6 学年で教科という枠を超えて横断的な教育ができる「総合的な学習の時間」が導入され、その一環として「まち学習」、「まちづくり学習」が実施されてきている⁵⁾。

しかし、関与する側と教育現場との連携、授業内容の調整等から、数回あるいは単発的なイベント、ゲーム感覚の授業となっている。そのため、数回の学習で導き出せる学習テーマとなってしまう、現実の都市が抱える問題の解決策を検討するといった授業は少ない⁵⁾。その結

果、ロジャー・ハート⁶⁾の「参画のはしご」で言えば、子どもが主体的に取り組み、さらに大人をも巻き込むような高次の段階にはなっていない状況にある⁷⁾。

そこで、小学生が主体的に取り組むことができ、小学校教員、地域、外部の専門家の連携により、共鳴し育むことができる息の長いまちづくり学習を目指した。本まちづくり学習の実践として、日本橋地域にある日本橋常盤小学校の第 5 学年の児童に対して、第一著者が大学院修士課程の学生であった 2004 年に授業を実施した。本稿では、授業設計や実施体制、小学校選定に至る経緯、具体的な授業内容を紹介し、その授業の効果が持続的であったのかを、5 年間を経て高校 2 年生となった当時の児童へのデプスインタビューによって明らかにする。

本論文の構成は、2. で既存のまちづくり学習の授業内容を概観し、その中で、まちづくり学習授業の留意点と授業実施後の中長期的な効果の計測事例を紹介する。3. では、まちづくり学習の実践内容を述べる。4. では、まちづくり学習後の中長期的な効果を分析するために、受

講した児童をはじめ保護者、教員へ実施した調査結果を示す。5.では、今後のまちづくり学習を展開する上での実施体制や授業内容について述べる。

本稿では「子ども」、「児童」、「生徒」という類義語が頻出するが、「子ども」は概ね18才までを指し、2004年当時に本研究のまちづくり学習を受講した小学生を指す場合は「児童」、そして当時から5年を経た現在の高校生を指す場合は「生徒」とする。

2. 既存のまちづくり学習とその効果測定

1981年、西山、渡辺⁸⁾が「まちづくり教育」の概念を示して以来、建築・都市計画学・住居学・教育学等、幅広い分野でまちづくり学習や子どもの参画の研究がされている。学校教育を対象とした研究は、総合学習や社会科、生活科・総合学習での事例が多い。中島、長谷川⁹⁾の研究によれば、多分野でまちづくり学習が実施されている。

a) 都市計画分野におけるまちづくり学習

先駆的にまちづくり学習を実施していたイギリスなど諸外国を参考にして、都市計画分野で子どもやその教育の問題が本格的に取り上げられるようになり、各地域でまちづくり学習が実施されてきた³⁾。都市計画・まちづくりへ子どもの視点を取り入れ、子どもの参加が進むにつれて、様々な体験重視型学習、まち探検、まちコンクール等が実施されている⁵⁾。しかし、事例の多くは単発的に実施されているため、大人からの情報提供が多く子どもの主体性を活かしきれなかったり、ゲーム的、イベント的要素が強いために楽しいだけで終わってしまったりと、地域が抱える問題意識の共有がうまくできないことが懸念されている¹⁾。厳しい地域の現実を、児童にどこまで情報提供し、授業を設計するのが非常に難しい。

b) 土木工学分野におけるまちづくり学習

「総合的な学習の時間」のテーマは、地域防災や河川に関わる水害対策や水質浄化、環境、まちづくりなど広範囲に渡っており⁹⁾、土木工学分野と密接に関連したテーマが多く含まれている。土木学会教育企画・人材育成委員会生涯学習小委員会（委員長：末武義崇）では、総合学習も含めた生涯学習に関する支援活動の一環として支援の仕組みを検討し、副読本や絵本等の支援策を作成している¹⁰⁾。また、行政機関や学会では、出前授業¹¹⁾の専門家を派遣する制度を整えてきた。しかし、派遣される担当者と教育現場との事前打合せの時間が取りづらく、調整がしやすい現場見学などの体験学習のような単発的な授業が多く実施されている。

こうした中で、松村¹²⁾は交通と地域を結び付けたまちづくり学習を実施し、数回に分けて段階的に授業プログ

ラムを実施している。

c) 外部協力者を伴ったまちづくり学習

まちづくり学習のような包括的な教育の準備に対する教員の時間制約や費用制約に対する支援体制の課題がある¹³⁾。またPBL（Project Based Learning）としての一定の専門能力が必要であることから、教員個人にのみ委ねるのではなく、外部協力者との連携が重要と考えられる。

中川¹⁴⁾は、まちづくり学習の持続的な実施主体の確立を目指し、2001年に東村山第七中学校で協議会を立ち上げ、授業サポート、まちづくり学習に対する教員の意識喚起、情報交換を実施している。協議会は、行政、地域住民、大学等で構成されている。当初は、外部者が校内に入り授業を行うことに対する抵抗もあったが、授業を通じて、外部者との連携の必要性に対する意識が浸透しているという結果が出ている。

大学生が主体のまちづくり学習も報告されている¹⁵⁾。大学生は、専門知識を活かした実践機会の獲得を期待する以上に、地域や社会への貢献意識と地域の人との関わりを求めている。

d) 学習実施後の効果分析

谷口¹⁶⁾は、過度なクルマ利用の問題を考えるモビリティ・マネジメント(MM)の一環の授業を、各地で実施しており、その授業の効果をアンケート調査を用いて、長期的な効果を検証している。階層規範活性化理論の枠組みを用いて、まちづくり全般から、より具体的な交通行動について、道徳意識や重要性認知を問う尺度、車への態度を問う尺度を設定している。その結果、学校教育におけるMMの効果が3年後にも継続している可能性があるとしている。

3. まちづくり学習の実施

第一著者は、地域の担い手に成りうる児童を地域で育てるために、小学校を舞台としたまちづくり学習を実施することで、児童をはじめ地域の方に少しでも地域に目を向けるきっかけづくりを考えた。もう一つは、まちづくり学習を通じて、児童の個人成長、人とかかわり、社会とかかわりを育むことを授業の目的とした。

義務教育過程である小学校を選定した理由は、1) 2002年度に小学3学年から6学年で教科という枠を超えて横断的な教育ができる「総合的な学習の時間」が設けられ、まちづくり学習の実施事例があるため実施可能性が高いこと、2) 地域の小学校は、地域の人にとって身近な場であることから、児童を介して大人同士のコミュニケーションが生まれる場へと成りうること、3) 中学生はほぼ全員が高校受験に向けて主要科目を重視する傾向があるが、小学生はある一部の児童が中学受験をするものの、比較

的授業カリキュラムが融通できるためである。

(1) 日本橋常盤小学校との授業連携の経緯

a) 対象地域の特徴

東京都中央区日本橋地区は、昨今の景気低迷により、かつての賑わいが失われつつある中で更新時期を迎えた建物の建て替えやそれに伴う再開発が具体化し、地元においても地域活性化の気運が高まりを見せていた。また、行政と地域をつなぐ役割として、「日本橋地区都市再生事業」の一環で学生まちづくり団体として「日本橋学生工房」が2002年に組織され、日本橋周辺にはまちづくりにかかわる様々な団体が存在している。

また、日本橋地域には自治会や青年会、婦人会が現在も機能しており、自治会をはじめまちづくり団体が協力した地域行事や、児童を対象とした地域行事（室一・本一縁日、バスハイキング、餅つき大会等）も昔から企画されている。このように、既に地域コミュニティと学校のつながりは形成されていたものの、地域を教材とした授業はまち巡りや老舗体験といった体験学習に留まっていた。その大きな要因として、日本橋は商いのまちであったため、仕込みやランチと夜の営業時間といった商いの都合上、商い以外のことを日中に対応することは非常に難しく、結果的に単発的な授業が大半となっていた。

b) 対象小学校の特徴

東京都中央区常盤小学校は日本橋の唯一の小学校であった。そのため、日本橋地域の自治会や青年会の関係者の方々が当該小学校の校友会やPTA会の関係者でもあった。筆者らが考える新たなまちづくり学習を学校側に受け入れてもらうためには、地域のオピニオンリーダーの理解と学校側との調整を取り持つてもらうことが重要だと考え、東京都中央区常盤小学校を対象校とした。

また、対象校は、都心にある小学校の特徴である区域外通学者が多く、中学受験を控えている児童も少なくない。そのため、住んでいる地域と、毎日通学している小学校のある地域が存在していたため、児童にとって、よりどころとなる地域が心に根付きづらい懸念があった。

そのため、小学校の教育方針は、「常盤っ子」を育み、第二の故郷として日本橋への愛着を高めるために、地域ならではの特色ある授業を実施することを掲げていた。それに合わせるように、2004年度と2005年度の2年間は、中央区教育委員会から研究奨励校の指定を受け、研究の窓口を生活科・社会科・総合的な学習の時間で、研究主題「ともに響きあい、地域に親しむ子どもの育成」といった地域と連携した小規模校ならではの学習支援システムの研究を行っていた¹⁷⁾。

2003年以前も、第1学年から第6学年までの6年間に地域に関する授業が実施されていた。

c) 対象小学校へのコンタクト

第一著者が所属していた日本橋学生工房は、日本橋地域の自治体やまちづくり団体をはじめ、国や自治体にも周知されている団体であったが、小学校との連携は学校行事への参加のみであり、小学校でのまちづくり学習内容を突然、学校側に提示することは無謀と考えた。そこで、既に日本橋まちづくりで繋がりがあった地域のオピニオンリーダーである町会長や青年会長に授業の理念を伝え、協力を要請した。次に、青年会長兼PTA会長から事前に教頭へ依頼主旨を説明し、打合せの時間をいただいた。教頭からのコメントは、第一著者がまず児童と触れ合い、実行可能性の有無を判断して欲しいという指摘であった。そこで、高学年の1泊2日の臨海学校に同行し、児童はじめ校長、教頭、教員とのコミュニケーションを図って実施が可能であることを確認した。その後、正式に校長に授業実施の依頼をした。

d) 小学校側からの要望事項

校長には、授業の実施目的と、その目的を実施するための授業設計案を複数案を提出した。小学校側から提示された指摘事項と依頼は下記のとおりであった。

- ・外部協力者が関与するメリットは、教育以外の専門性を持った人が授業に参画することにより、児童をはじめ担任にとっても新たな知識やモノの考え方に触れられるので、専門家の方の授業を組み込むこと。
  - ・まちづくり学習は、筆者らが中心となり授業を展開することは構わないが、必ず担任である教員の意向は踏まえること。
  - ・児童に授業の関心を持たせ続けるためには、初回の授業で決まるため、細心の注意を払う必要があること。
- これらの要望事項を踏まえ、授業設計書を加筆修正をし、小学校側と連携した授業提案書を作成した。

(2) 本研究のまちづくり学習の実施方針^{18),19)}

a) 授業設計

以下の諸点に留意して授業を設計した。

- ・児童の柔軟な発想をできるだけ制限させないことを心がけて、地域の歴史的成り立ち、対象地域における都市開発状況、交通状況等の前提条件を提示した上で、実現可能性の高い提案をできる授業内容を実施する。
- ・特に、上記のような前提条件を提供することで、授業に対する児童のモチベーションが低下したり、維持できないことが懸念されるため、室内作業とフィールドワーク等の適度なバランスやタイミングを心がけた授業設計をする。
- ・初回の授業でどれだけの児童に授業に対するモチベーションを持たせられるかが、2回目以降のまちづくり学習の円滑な実施の鍵になる。できる限り、児童の質疑に耳を傾け、幅広い情報の提供を実践する。

表-1 まちづくり学習の授業設計

日本橋を知る		日本橋をみる		日本橋を考える			日本橋をつくる			日本橋を提案																			
4コマ		4コマ		16コマ			...19コマ...			7コマ																			
日本橋のまちの説明		調べ学習		まち歩き①		問題点の抽出		都市計画学の授業		提案づくり		まち歩き②		(提案を地図上に落とし込む)		模型の下地づくり		中間発表と保護者との意見交換		模型づくり		発表会		最終学内発表会		発表練習			
【2】		【2】		【4】		【2】		【3】		【2】		【3】		【4】						【19】				【3】		【1】		【3】	

図-1 外部(専門家や大学生)と連携した授業体制

- ・自宅へ持ち帰って調べる作業や模型材料の収集等ができるテーマ設定をし、家庭内でもまちづくり学習の話のできる素材やきっかけを提供する。
- ・教育現場の関係者や保護者に留まらず、外部協力者(地域、企業、教育委員会、メディア)を巻き込んだ発表の機会を設け、自分たちの考えを他者に伝えられる場を演出する。
- ・対象児童は、情報収集能力、工作技能、生活科、社会科の時間で地域の基本的な情報を有している高学年に設定する。

b) 地域に即した授業方法

総合的な学習内容は、通常の授業準備とは異なり、授業コマ数のみが決まっており、各学年の担任が指導要領に基づいた授業設計、授業準備(副教材・外部参加がある場合は事前調整等)、授業実施の一連の作業をこなさなければならない。一方で、教員は日々の授業準備や研修・職員会議等に時間が取られるため、新しい総合的な学習内容を十分準備することが難しく、前年に実施した授業内容を少し改良した授業を実施することもあった。

そこで、授業実施の準備や運営を円滑に進めるために、地域の関係主体がどのように地域と接点をもっているかを整理し、地域の資源や人材を整理した。また、地域の実態に即した授業にするために、第一著者は地域行事やボランティア等の参加などを通じて、PTA会長はじめ保護者、町会長、地域のまちづくり団体の事務局長から情報収集したところ、1) 部外者の参入による児童の混乱に配慮し、外部協力者の所属を明確にすること(校長、PTA会長、保護者の声を参考)、2) 教員が教育面でのサポートやアドバイスがしやすい環境とすること(教員の声を参考)、3) 通常の授業以上に、児童が教室の外の学習やグループで作業する学習も多くなるため、教室外での児童の安全確保、グループ作業中の言い合いや喧嘩をなだめたりするためにも、担任以外にフットワークが軽く、体力のある人材が必要であること(校長、保護者の声を参考)等の意見があげられた。これらを踏まえ、既に日本橋学生工房という複数の大学・大学院の建設工学

系の学生団体が、地域住民とのつながりを構築していたため、日本橋学生工房を含めた実施体制を考えた。

c) 外部(専門家や大学生)と連携した授業体制

教育現場で抱えている時間的・費用的な課題を念頭に、専門家や大学生と連携する際に配慮した点は以下のとおりである。また、具体的な授業体制は図-1に示す。

- ・小学校側の授業に対する要望を考慮し、事前打合せを数回実施、授業実施後の反省点と次の授業計画の見直しができるような環境を整備する。
- ・「まちづくり学習」の授業の副教材や模型材料、地図等の準備費用は、学校側の授業費用には限界があるため、横断的な授業である「総合的な学習の時間」として、他教科との連携を図るとともに、外部からの人的な支援で補填できる環境とした。

(3) 授業の概要

日本橋のまちの未来を考える機会を通じて新たな日本橋まちづくりのあり方を考えることで地域に親しむ授業を目標とした。対象校の児童は、知識や技能面でも秀でたものを持ち、基礎的な学力は定着している一方で、思考力・判断力、表現力・相互啓発が弱い面があった。まず、児童の一人一人の探究心や問題解決能力、積極的に人に関わろうとすること、そして自分の思いを相手に伝えようとする自己表現力を育み、1つの課題を共同で解決できるようにすること、次に、授業を通じて地域との距離を縮め、社会とのかかわるきっかけやまちづくりへの関心を高めることの2つを目標とした。

具体的な授業の実施概要は下記に示すとおりである。

- ・対象小学校：東京都中央区立常盤小学校
- ・対象学年：小学校第5学年
- ・実施期間：2004年9月～2005年3月(6ヶ月間)
- ・協力者：教員、常盤小PTAみどり会、日本橋地区町会とし、授業設計を示す。本研究の授業は以下に示す5段階のステップとして設計した(表-1)。

a) 日本橋を知る(情報収集)

教員から初回時の授業の動機づけ次第で、その後の授

図-2 発表会の様子

業へのモチベーションが左右されるという助言を頂いていた。そのため、初回授業は児童が日本橋のまちづくりを身近に感じてもらうために、言葉ではなく、幅広い様々な日本橋地域の写真を見せることとした。それにより、児童がまちとの距離感を縮めることを試みた。また、外部者が参画する授業のため、児童に不安を抱かせないために、参画する日本橋学生工房学生のプロフィールリーフレット(趣味やニックネーム、所属大学名)をもとに自己紹介を実施した。また、親近感を高めるために、常にネームバッジを付けるようにした。

次コマでは、こちらが提示したテーマ(エリア)のうち、各自興味を示したテーマを集約し、グルーピングをした。その後、グループごとに、インターネットや書籍等から情報収集し、その結果を模造紙に整理し、次のまち歩きで見たい場所や確認したい場所を洗い出した。

b) 日本橋をみる(現場視察)

児童が校外に出ることは、通常の授業と異なり、非常に好奇心が高くなり遊んでしまう可能性が高い。そのため、a)の調べ学習を通して、まち歩きの目的と確認する場所や気になるポイントを明確にした段階で、まち歩きを実施した。実際に日本橋界隈へ出かけ、日本橋の良いところ、問題となっているところ、現在進行中のまちづくり計画等を視察した。グループごとにデジカメを貸出し、児童の視点で写真撮影を行った。

c) 日本橋を考える(発想を整理し提案作成)

まち歩きをして、日本橋の良いところとダメなところを整理した(問題点の抽出)。また、千葉大学の都市計画学を専門とする原昭夫客員教授に依頼し、日本橋の成り立ち、地図の読み方や描き方、模型をつくる際に役立つスケール感に関する授業を実施した。その際に利用した副教材は、原氏の手作り冊子であった。

d) 日本橋をつくる(提案の具体化)

上記までの授業を踏まえて、児童が考える日本橋の未来予想図を模造紙に作成した。次に図工専門の教員が補助で参加してもらい、模造紙に描いた提案をもとに、児

童が模型材料を持ち寄り、500分の1の模型を作成した。児童が模型を好き勝手に模型を作成しないように、事前にスケール感を教えたことが非常に重要となった。

e) 自分たちの提案を発表する(プレゼンテーション)

より多くの方に児童の提案を知ってもらうため、児童自らが広報活動を行った。発表会の広報ポスターを作成し、三越や商店、東京メトロの駅等に掲示した。発表会には、保護者、地域の方(日本橋三越本店、三井不動産株式会社、老舗の店主等)、中央区(都市計画課、教育委員会)、メディア(読売新聞社、朝日新聞社、西日本新聞社)の参加が得られた。発表会の様子は、図-2に示す。

発表形式は、各エリア(中央通りチーム、室町仲通りチーム、日本橋川チーム)の発表とともに、全体としての未来の日本橋を提案した。発表時間は5~10分として、チーム全員が一人ずつ提案のポイントを発表した。保護者の方は、日頃のまちづくり学習の内容を知っていたため、実際に完成した模型を見て、より感動しているコメントが多かった。

4. 授業効果の持続性に関する調査概要^{20),21)}

(1) 調査目的

まちづくり学習は、各地で様々な取り組みがなされているが、授業の効果の持続性を検証した研究はない。このため、授業実施による効果を様々な角度から把握するために、2004年にまちづくり学習を受講した小学校5年生が、高校2年生になった授業実施5年後の2010年時点で、授業効果の持続性を把握することを目的とした。また、授業を通じて、周囲の大人にもまちづくりへの関心を高めることも目的としているため、保護者や対象校の教員も対象とした。さらに、まちづくり学習の受講有無の効果比較するために、授業を受講していない児童も対象とした。

(2) 調査概要

a) 調査期間

アンケート調査期間は、2010年9月17日~2010年10月4日とした。また、生徒へのインタビューは2010年10月17日~2011年1月30日の土日に実施した。教員へのインタビューは2011年2月23日に実施した。

b) 調査対象者

対象者は、1)まちづくり学習の受講児童と2)その保護者、3)当時の授業に参画した教員、4)まちづくり学習を受講していない児童を対象とした。なお、4)については、対象校は1学年1学級のため、同学年間でまちづくり学習実施有無の効果を比較することができなかったため、まちづくり学習を除く教育カリキュラムがほぼ同じであり、

発達状況も近いと判断できる当時の小学6年生を対象とした。

(3) 調査方法

当時のまちづくり学習に関する記憶や当時のまちづくり学習がきっかけとなった変化をより多くを引き出すための調査方法として、アンケート調査とインタビュー調査の2種類を実施した。

アンケート調査では、生徒のまちづくり授業に対する記憶や印象、まちづくり学習がきっかけになった行動の変化を調査した。次に、当時のまちづくり学習の授業資料や感想文を提示して当時の記憶を思い出してもらい、アンケート調査の結果をもとに、より深くまちづくり学習について聞き込むインタビューを実施した。保護者に対してはインタビューが難しいため、アンケート調査のみで子どもの調査結果との比較、保護者自身の5年前のアンケート調査との比較をした。

当時の教員に対してはまちづくり学習に関わった方が少ないため、インタビューのみを実施した。

(4) 調査項目

a) まちづくり学習の受講児童

5年が経過していることから当時のまちづくり学習の記憶が薄れていることが予想された。そのため、調査票とともに、まちづくり学習内容の写真やまちづくり学習の感想文を同封し、当時の記憶を鮮明に思い出す工夫をした。具体的には、以下の項目について把握した。

- ・まちづくり学習それぞれの内容について、どれほど記憶に残っているかを確認する。まちづくり学習直後、5年後の経年的に調査することにより、まちづくり学習内容それぞれの印象を把握する。
- ・まちづくり学習に関わった日本橋学生工房、大学教授の授業の印象とまちづくり学習の実施期間についての印象を把握する。
- ・成果発表の場として、校内発表会や新聞の報道、ラジオ放送があった。それらの方法によってまちづくり学習を外部に発信したことの印象を把握する。
- ・まちづくり学習が生徒個々にどのような影響を与え、定着したのかについて、「個人の成長(自己啓発)」、「周囲とのコミュニケーション(他者との関わり)」、「将来の憧れ(進路への影響力)」、「社会への貢献(社会性)」、「地域への愛着心」の5つ項目を把握する。また、インタビューは、以下の点に留意して行った。
- ・既に実施されたアンケートの回答内容の具体性を増すために、具体的になぜ Yes と回答したのか、なぜ No と回答したのかを把握する。
- ・設問間、あるいは保護者アンケート調査の回答との整合性を図る。具体的にはアンケート調査で大学教授の

授業を覚えていないと回答したにもかかわらず、印象については良かったと回答している場合、なぜそのような回答となったのか把握する。

- ・アンケート調査では聞ききれなかった内容について把握する。具体的には、中学・高校でまちづくり学習のような内容の授業が実施されているかなど。

b) まちづくり学習を受講していた児童の保護者

当時、まちづくり学習の受講児童の保護者は、宿題の補助、自宅から模型材料の調達、休日を利用した日本橋まち歩きなど、児童の授業の素材提供、資料収集の手伝いといった授業に関与する仕掛けをしていた。まちづくり学習の最後に開催した発表会には、全員の保護者が参加した。具体的には、以下の項目について把握した。

- ・まちづくり学習の記憶がどの程度残っているかということ、具体的なまちづくり学習の思い出を聞き、保護者にとってまちづくり学習のどの要素が記憶に残るのか把握する。
- ・まちづくり学習の実施タイミングが小学5年生だけでなく、他の学年で実施することの是非を把握する。
- ・5年間で保護者自身が、当時のまちづくり学習の波及効果を受けて、実際にどういう意識や行動に変化があったかを把握する。
- ・保護者からの視点から、生徒の意識や行動に変化があったかを把握する。

c) 授業に参画した教員

まちづくり学習の実施以前も、各学年に合せたまちに関する授業を実施していた。地域の方々が「老舗の伝統技術」や「江戸時代の遊び」等を数コマの体験学習を実施していた。しかし、本まちづくり学習は単発ではなく1学期分の長期間の授業、授業内容も学生主体のため成果が測れないこと、外部の方との連携をしながらの授業を実施することなどの面からみても未知数なことが多かった。そこで、まちづくり学習を経験した教員を対象に、まちづくり学習の内容と方法の評価、ならびに今後のまちづくり学習の方向性について、まちづくり学習に関わったエピソードからインタビューした。項目としては以下の5つが挙げられる。

- ・まちづくり学習内容に関すること
- ・まちづくり学習の実施体制、進め方に関すること
- ・外部が関与した授業への懸念要因、改善点など通常の授業体制と異なる実施方法など
- ・まちづくり学習を通じた教職員へのまちづくりに対する意識変化、地域との関わりの変化について
- ・まちづくり学習を通じて教育側が今後の教員生活に活かしたことや参考になったこと
- ・教育側からみて、まちづくり学習を他の地域へ展開するために考慮すべきこと

図-3 まちづくり学習の授業直後の印象と記憶

d) まちづくり学習を受講していない児童

対象校は1学年1学級のため、同学年間でまちづくり学習実施有無の効果を比較することができない。そこで、まちづくり学習を除く教育カリキュラムがほぼ同じであり、発達状況も近いと判断できる当時の小学6年生を「まちづくり学習を受講していない児童」と設定し、受講している児童と同様に、「地域の愛着心」、「社会への貢献」を把握し、受講有無の効果を比較した。

(5) アンケート調査およびインタビュー実施状況

a) アンケート調査票の回収状況

アンケート調査票は、a)児童とb)保護者の24組に対して配布した。提出期限後においても電話で回答催促を行った結果、生徒：24部配布 19部回収(79%)、保護者：24部配布 19部回収(79%)と調査票投函用封筒は別々であったが、19組の親子から回収できた。保護者の方が早く投函し、追って数日後に子供が投函する傾向にあった。保護者が率先してアンケート調査に協力し、子供へのアンケート調査の協力を薦めたことが予想され、結果的に両者の回収状況を高める結果になったと考えられる。

b) インタビュー実施状況

調査協力の意向が得られた11名の生徒を対象に実施した。また、当時の校長、教頭、小学校5年生の担任の教員3名に対して2時間程度のインタビュー調査を実施した。

5. 授業効果の持続性に関する調査結果

(1) 授業効果の持続性

a) まちづくり学習実施直後の印象と現在の記憶の比較

図-3で当時のまちづくり学習実施直後に実施したアンケートによる印象と本調査によるまちづくり学習の記憶を比較すると、まちづくり学習直後に興味をもっていた授業内容ほど、記憶に留まる傾向にあることがわかる。個別にまちづくり学習直後と現在とを比較すると、当時

の教室での座学や作業等についてはあまり興味を示していなかったと回答したが、5年後の学習の記憶では「覚えている」と回答している生徒が4名存在した。

アンケート結果を踏まえ、記憶を高めた授業内容や経験をインタビュー調査から把握した結果を以下に示す。

- ・「模型づくりを覚えているか」という質問では、「一番記憶に残っている」、「他のことをほったらかして夢中になって作っていた」、「みんな楽しんでいて、模型づくりのために学校へ行っていたかもしれない」、「模型づくり中に、男子同士がケンカをしていた(出来事)」や「模型の材料がネズミに食べられた」等の通常の座学ではあまり起きえないアクシデントであったり、実習的要素が大きかったため、記憶を留めるきっかけになっていた可能性がある。
- ・「まち歩きを覚えているか」という質問では、「日本橋川が流れていないことと汚さに驚いた」や「三越や三井本館を見たり、メトロリンクバスに乗った」などの自分達で見た経験がまちの印象が記憶に残っていた。実習的要素が大きい授業内容がより記憶の持続に効果的であった。
- ・「教室での座学や作業等の記憶が高い理由」を聞いたところ、「普段の授業とは異なったまちづくり学習の進め方であったこと」、「卒業してから外部の人が参画した授業を受講する機会がなく、今でも覚えている」、「今、大学を意識するようになり、大学の先生が来たなと思い出した」という話をしていて、当時は退屈という印象により面白くないと回答したが、卒業以降に類似した経験がなかったり、大学を意識し始めた年代に成長したことで、結果的に記憶が維持されていると考えられる。
- ・「大学教授による都市計画学のまちづくり学習を覚えているか」という質問では、「手を広げて長さを測ったことを覚えている」や「時のものさし」といった都市のなりたちのまちづくり学習中のフレーズを覚えている等の都市計画の内容が記憶として留まっていた。まちづくり学習実施直後と5年後の学習の個人毎

図-4 授業がきっかけとなった行動

の記憶を比較すると、当時は都市計画学のまちづくり学習の印象が薄く児童が楽しくないという声もあったが、5年という歳月を重ねることで、都市計画学の授業内容が定着したのではないかと考えられる。

- 「発表会を覚えているか」という記憶に関わる質問では、「発表はすごく緊張した」、「スーツの人がいて威圧感があった」や「知らないおじさんに発表のことを、色々と言われた」という記憶しかなかったのに対し、「発表会実施の良否に対する印象は」を聞いたところ「まちづくりを考えるのだから、まちの人を対象に発表できてよかった」、「まちの人には行事でお世話になっていたの、感謝の意味を込めて提案できてよかった」、「小学生でもまちづくりを考えているということを伝えられたのでよかった」、「低学年が模型にすごく興味を示していたのでよいことだと思う」、「成果を周りの人に見てもらえて、自分達がやったことはよかったんだと思えた」や「まちづくり授業の発表会等の話す力が身につくし、多少なりとも進路にも影響がある」というポジティブな意見が多かった。

b) 生徒の行動の変化

図-4に示すように、全生徒19名のうち、約80%の生徒が「周囲の意見や考えを聞けるようになった」と回答している。次いで、約70%の生徒が「日本橋や地元に興味を持つようになった」、「情報収集力がついた」、「川や道路の汚れやゴミが気になるようになった」と回答している。少数派ではあるが、「まちづくりに参加するようになった」と回答している生徒が1名存在していた。

インタビューでは、各設問を選択した理由やエピソードを聞いたところ、以下のような話が挙げられた。

- 「個人の成長(自己啓発)」については、今まで学校教材や資料だけで情報収集をしていたが、情報収集情報

が書籍やインターネット検索、人から聞く、実際に観に行くといった選択肢が増えたと全9名のうち6名が話していた。また、「発言した意見を紙にまとめることで表現力が身に付いた」といったプレゼンテーション能力向上に関する意見や、「まちを歩きながら気になることが増え、『道が狭いののに車が多い』と気付くと、『歩道を作れば良いのにな』と考えたりと、問題点と解決策を対で考えるようになった」、「課題を考えて結論を出すプロセスを考えられるようになった」といった問題解決能力を身に付いた生徒が存在した。

- 「周囲とのコミュニケーション(他者との関わり)」については、「小学生の頃は他人の意見を聞けなかったが、まちづくり授業では意見を聞かないと成り立たないので聞けるようになった」や「以前は言いたいこと押し通していたが、授業では議論が多かったので周囲の話を聞けるようになった」といった他者の意見を受け入れ、他者と協同する姿勢へと変化した。まちづくり学習はお互いに力を合わせ助け合いながら学習もひとつのきっかけとなっているようである。一方で、グループ作業が多かったにも関わらず、リーダーシップをとれるようになったと話す生徒はいなかった。中学校や高校生活で、リーダーシップをとる機会がおそらく少なかったためではないかと推測される。
- 「将来の憧れ(進路への影響力)」については、生徒が徐々に進路を意識している時点であったために、大学や専攻分野に関する設問は早すぎたようだ。それでも数名は、「今まで関わる事がなかった大学生の活動を知ることができ、大学を想像することができた」や「大学生の様子を見て、大学が楽しそうな場だと思った」といった大学を身近に感じる機会につながったと話していた。

表-2 まちづくり学習の経年変化

当時	すごく していき			ていき			やや していき			した くない		欠席		計
これからも日本橋を よくしていきたい	3			15			5			0		2		25
現在	Y e s	N o	未 回 収	Y e s	N o	未 回 収	Y e s	N o	未 回 収			未 回 収	計	
まちづくりに関心を もつようになった	3	0	0	6	6	3	1	1	3	-		2	0	25
まちづくりに 参加するようになった	0	3	0	1	11	3	0	2	3	-		0	2	25
日本橋学生工房のような 組織で活動したくなった	1	2	0	5	7	3	1	1	3	-		1	1	25
まちに興味を もつようになった	3	0	0	10	2	3	0	2	3	-		1	1	25
地域行事に 参加するようになった	1	2	0	4	8	3		2	3	-		0	2	25
卒業後も日本橋へ 訪れるようになった	3	0	0	6	6	3	0	2	3	-		0	2	25

図-5 授業実施有無によるまちづくりへの関心

c) まちづくりへの参画意向と地域への愛着の醸成

表-2に示すように、まちづくり学習直後の調査では欠席者を除く全員が日本橋に関心を示していた。高校2年生になった現在は、13名が「まちに興味を持つようになった」と回答し、10名が「まちづくりに関心を持つようになった」と回答している。インタビューでもまちづくりの場があれば参加してもよいと述べる生徒が10名中6名おり、「日本橋学生工房でまちづくりをしたい」とまちづくりに強い意志を示す生徒も1名存在した。このようにまちづくり学習効果は5年を経て薄れる傾向にあるものの、多くの生徒にまちづくり学習効果の持続性がみられることがわかる。

さらに、現時点では社会との接点も少なく、自分たちのやりたいことが確立していないため、具体的なまちづくりへの関与の話は出てこなかったが、「まちづくりを含めて社会貢献に興味があるし、今後していきたい」や「雑然としたまちが多く、まちがどうやって成り立っているか興味がある」など、将来的には自分のやりたいことをやりつつ、自分にできる範囲でまちづくりやまちのためになることをしたいという話をしていた。一方で、生徒の多くはまちづくり学習以前から日本橋の行事に参加しており、「行事でまちの方々からお世話になっていたので、まちづくり学習のモチベーションが上がった」と述べる生徒もいたことから、地域行事への参加やまちの方々との接触が、地域への愛着心の醸成に影響を及ぼしていると考えられる。

d) まちづくり学習実施有無によるまちへの関心の比較

本研究で実施したまちづくり学習を受講していない上級生の小学生6年生と、まちづくり学習を受講した小学生5年との比較結果を図-5に示す。

まちへの関心をみると、日本橋のまちへの興味や地域

行事への参加には同じ傾向だった。しかし、まちづくりに関わる項目については、まちづくり学習を受講生徒の半数以上は関心があると回答したのに対して、まちづくり学習を受けていない生徒は皆無であり、顕著な違いがあった。

(2) 保護者への波及効果

図-6に示すように、全19名の保護者のうち、約半数の保護者が「よく覚えている」と回答している。また、「まあまあ覚えていて」と回答した保護者を合わせると、全体の約9割が覚えていることになる。

当時「まちづくり学習のことを自宅で一緒に考える機会があった」と20名の保護者が回答していた。5年後の調査では、16名のうち10名が「まちづくり学習がきっかけでまちづくりに参加した」との回答していた。このことから、まちづくり学習を通じた大人への波及効果にも持続性があることがわかる。

そして、保護者が感じた子供の変化としては、2名の保護者が「授業をきっかけに、物事を多方面から考えられるようになった」や「授業をきっかけに、考え方の幅が広がったと感じた」と回答していた。また、子供の興味に変化としては、4名の保護者が「以前よりも日本橋のまち、歴史的建築物、商業等に興味を持つようになった」と回答していた。

(3) 教員への波及効果

教員が第1筆者らに初めて会った際の印象は、「どんな方々なのかわからなかった。小学校の治安という観点からでは、外部者＝不審者になってしまった。しかし、学校行事の手伝いをはじめまちづくり学習の授業準備等でよく学校に訪問するうちに、児童との距離も縮まり、

図-6 保護者のまちづくり学習の記憶

教員は学生を準職員のように感じていた。」といった話をいただいた。

毎年、各県の小学生が地元の橋を紹介する全国橋サミットが開催される。そこで、対象校の児童が日本橋地域の紹介とともに、日本橋の紹介をする機会があった。毎年、発表を聞いているが、まちづくり学習を受講した児童と受講していない児童の発表内容には大きな違いがあり、受講した児童はまちを面的に捉え将来のまちづくりを語っていたようだ。それを聞いた副校長は、非常にまちづくり学習が活かされている実感したようだ。

また、外部の人に向けたまちづくり学習発表会では、まちづくり学習が地元の方や周辺企業の方に大変賛同して頂いているということを知り、非常にまちづくりを身近に捉えることができたようだ。

教員は、校内での児童の変化は大変注視している一方で、第3者として児童の変化や授業成果を見ることがなかった。そのため、外部からのまちづくり学習の評価や意見、感想は、教員にとっては大変興味深いものであった。児童を通じて、教員もまちづくりへの印象も変わったことがわかった。

(4) 考察

a) まちづくり学習の是非

生徒のインタビューでは、全11名が今後もまちづくり学習を実施した方が良いと語っており、具体的な意見を以下に示す。

- ・ 模型づくり授業を常盤小学校5年生の課題にしたらいのではないかなと思う。後輩が5年生の発表をみて、それを引き継いでまた来年模型をつくと新しい観点も加わりより良いものが出来るのではないかなと思う。低学年のころから5年生になったら模型を作るんだという意識を持ち、まちを見ると捉えか方や意識も変わったのではないかなと思う。私は下校中に川を見て帰ろうといったことはなかったが、段階的に授業を進めることにより、模型を意識して興味を持ってまちを見ることが出来る。
- ・ 中学へ進級すると地域学習がなく、小学生で地域学習を学んでおくと楽しかった記憶として残る。興味がな

くても機会があった方が後になったよかったと思うと思う。

- ・ 友達と付き合うことが苦手な子も、グループ学習は少人数で絶対に話さなければいけないので、楽しいと思う。普通の授業では外に出ないので、まち歩きは小学生にとって新鮮で楽しいと思う。
- ・ 教員のインタビューでは、「ものづくりを通じてまちの将来を感じ、人とかわることで人が好きになり、地域の歴史に興味を持ち、結果的にまちを好きになるのではないかな」、「まちづくり学習によって、将来に渡って日本橋を気にし続けるはずである。まちづくり学習時にはまちづくりとして捉えられなくても、成長して社会に関わる時に、まちをもう一度考えるようになるだろう」と回答していた。

b) まちづくり学習の実施時期

小学校5年生を対象とした実施時期は、保護者19名中14名が「ちょうどよかった」と回答し、6ヶ月間というまちづくり学習期間も生徒19名中11名が「ちょうどよかった」と回答している。また、生徒からのインタビューでは、「低学年の頃から模型を作る意識で段階的に学年でやった方が捉え方も変わってくるのではないかな」、「低学年では人の話を聞けないので、高学年になってからが適当である」という話をしていた。

保護者からのアンケートでは、「低学年、中学年だと難しい。また中学生だと常識や色々な考えに縛られて純粋なまちをこうしたい!という意見が出にくいと思うので、適切な時期であったと思う」、「未来のことを知る(考える)ことは、今までの日本橋の歴史を理解することも大切なので、あまり早い時期だと難しいと思います」という回答が得られた。一方で、「とても大きなテーマの為、段階的に実施することによって、成長に応じた視点で様々な問題を見ることができ、違ったものができるかもしれない」という回答も得られた。

c) 外部に関わる価値

まちづくり学習は、大学生が中心に進め、大学教授やまちの方々の話を聞く機会も設けた。一般的には外部が教育の現場に入ることは安全面や教育面で非常に難しいとされていた。教員へのヒアリング調査では、児童に第二の故郷として日本橋への愛着心を育みたいという当時の教育方針と授業内容が合致していたため、数ヶ月という短い準備期間ではあったが、本まちづくり学習の実施が可能となったこと、現在の児童は兄弟が少なく、スキップも少なく、若い大学生がまちづくり学習に参画することで、お兄さんお姉さんという兄弟感覚になり素朴な疑問に答えてくれ、学習意欲が高まったのではないかと回答していた。

生徒へのインタビューでは、「外部の方と話すことが新鮮で楽しかった」と述べる生徒が多く、外部との接触

がまちづくり学習の関心を高める要因となっていた。生徒は外部に関わることに良さを話していた。

6. おわりに

(1) 本研究の成果

本研究では、2004年度に日本橋常盤小学校5年生を対象に実施したまちづくり学習の持続性について、その児童が高校2年生になった5年後にアンケート調査とインタビューを実施し、まちづくり学習効果の持続性を検証した。その結果、まちづくり学習の効果は、5年後も持続しており、まちへの関心やまちづくりへの関心を持ち、機会があればまちづくりに参加したいという意識の醸成に本まちづくり学習が役立っていることがわかった。また、まちづくり学習を受講していない児童との比較において、上記の傾向が強いことも確認できた。さらに、まちづくり学習計画の内容に関して、実施時期やまちづくり学習構成など、教員や保護者から一定の評価が得られていることも把握できた。

(2) 今後の課題と展望

本研究で実施したまちづくり学習は、初年度は第1筆者をはじめ大学生と小学校とが協議をしながら試験的に実施した。翌年からは初年度の授業内容をもとに、担任が主体的に取り組み、必要に応じて大学生が参加する体制で実施し、現在では小学校の教員が主体的に取り組んでいる。そして、小学校がまちづくり学習に関する予算を組み、今まで手弁当で参加していた大学生に対して現場調査や実技補助等の交通費が支払われるようになり、より持続可能な授業体制へととなりつつある。このような状況にある中で、今後の課題として以下の点が挙げられる。

- ・授業設計では「知る」→「みる」→「考える」→「つくる」→「提案」という段階的な授業内容を設定し、段階的かつ高次の参画のはしごを目指した。現在、教育指導要領の改訂に伴い、英語や情報リテラシー等の授業が増え、まちづくり学習に充てられる時間数が短縮されている。本研究の段階的な授業内容をもとに、現在の養育指導要領を考慮し、授業コマ数の再配分することが求められる。また、教員からは学習の定着性という面からみて、35時間以下に短縮することは、好ましくないという回答も得られている。以上のことを踏まえ、今後は実施可能なまちづくり学習への授業コマ数の設定が必要である。
- ・実習的要素が大きい授業内容は、授業の記憶に大きく影響していた。一方、当時あまり興味のなかった授業が5年経過しても記憶に留まっている傾向もあった。

これは、授業直後の授業評価を受けて、ただちに授業内容を変更することが必ずしも是とはならないことを示唆している。

- ・まちづくりへの関心を高めるという目的の他に個人の成長という視点でみると、「長い期間をかけて、1つのものを最初から最後まで創り上げられた経験は少ない」と述べている生徒が存在していた。一つのことをじっくりやり抜くような学習の重要性が示唆される。
- ・授業では、地域との連携、大学生、大学院生という立場から授業に関与する実施体制を考えた。まちづくり学習は、題材が地域資源、地域性を配慮する必要があるため、多様な大人が関与することが非常に有効であった。今後は、この授業体制が継続性をもつための仕組みを検討する必要がある。

謝辞：アンケート調査の実施をご快諾くださった常盤小学校前校長茂呂政孝氏、元校長梶井貢氏、元教頭富田貴志子氏、常盤小学校PTAみどり会 佐久間一郎氏(当時会長)、常盤小学校校友会 会長橋本敬氏、事務局田崎珠美氏に心よりお礼申し上げます。

また、日本橋学生工房を設立し、学生中心のまちづくり活動の環境を整えていただいた政策研究大学院大学森地茂特別教授や一般財団法人道路新産業開発機構浜田誠也氏をはじめとする皆様に謝意を表します。

注

- 1) デザインゲーム：アメリカの建築士 H. Sanoff が発案した市民参画を目指すまちづくりの実践的な手法であり、わが国では世田谷区で最初に実施されている。グループによる話し合いを重視し、ゲームへの参画を通して環境や社会や技術が複雑に絡み合う現実を理解することができるのと同時に、普段気づかない身近な環境について考え直すことが狙いである。
- 2) まちワーク：まちワークの中心的人物である E. Adams は、環境とデザインに関するプロジェクトで科学や技術の知識を責任もって用いる能力の形成を目指している。これは直接まちづくりに参画する学習ではなく、子ども達の作品や願いをまちづくりに生かしていこうとするものである。わが国では、1993年に始まったいわきまちづくりコンクールが挙げられる。それ以降は多数地域で実施されている。
- 3) 都市環境学習：イギリスが子ども参画を考え、実施した手法である。子どもが環境に関心をもち、知識・態度・技術を身につけ、しっかりと環境倫理をもち、参画し行動することを目指している。そのフィールドとして、自分たちの住んでいる地域の環境をテーマとして、1990年代には学校カリキュラムとして位置づけられるようになった。まちに関する歴史的・環境的な情報を収集・展示する。

参考文献

- 1) 竹内祐一：社会科教育におけるまちづくり学習の可能性，千葉大学教育学部研究紀要，I，教育科学編，Vol.47, pp.55-69, 1999.
- 2) 寺本潔，岩本廣美，吉田和義：子どもの手描き地図からみた知覚空間の諸類型，愛知教育大学研究報告 40 (人文科学編), pp.95-110, 1991.
- 3) 野田敦敬，加藤亜美：都市部における「地域への愛着」の基盤を築く生活科学学習，愛知教育大学教育実践総合センター紀要，13, pp.67-74, 2010.
- 4) 安藤真理：子供を対象とした「まちづくり学習」の展開の可能性に関する研究－横浜市の事例を通して，「住まい・まち学習」実践報告・論文集(5)，財団法人住宅総合研究財団，pp.109-114, 2004.
- 5) 木下春雄：小学校社会科におけるまちづくり学習の授業設計－子どもの参画の資質形成を視点にして－，兵庫教育大学大学院，学位論文，2003.
- 6) ロジャート・ハート著，木下勇，田中治彦，南博文監修，IPA 日本支部訳：子どもの参画－コミュニティづくりと身近な環境ケアの参画のための理論と実践
- 7) 財団法人住宅総合研究財団住教育委員会：「住まい・まち学習」実践報告・論文集，財団法人住宅総合研究財団，No.1-No.10, 2000-2010.
- 8) 西山康夫，渡辺貴之，村瀬章：「まちづくり教育」の概念と展望，都市計画，Vol.116, pp.9-15, 1981.
- 9) 津波防災教育のための手引き：http://www.ce.gunma-u.ac.jp/kamaishi_tool/index.html
- 10) 教育企画・人材育成委員会 キッズプロジェクト検討小委員会：http://www.jsce.or.jp/committee/education/syougai/books/books_01.htm
- 11) 教育企画・人材育成委員会 キッズプロジェクト検討小委員会：国土交通省の総合学習支援 <http://www.jsce.or.jp/committee/education/syougai/sougou/mlit.htm>
- 12) 松村暢彦：小学校を対象とした道路と地域の工業の関連性に関する学習プログラムの開発と実践，土木学会論文集 H, Vol.2, pp.53-61, 2010.
- 13) 片石圭介，赤松宏和，中川義英：義務教育過程における「まちづくり学習」の支援体制に関する研究，土木計画学研究・講演集，Vol.26, 2002.
- 14) 中川義英，赤松宏和，片石圭介：中学校における「まちづくり学習」の実践と教員との協働，土木計画学研究・講演集，Vol.27, 2003.
- 15) 山田裕貴，小松尚：学生主体のまちづくり活動の現状と課題，日本建築学会学術講演梗概集 F, pp.11-12, 2009.
- 16) 谷口綾子，小林三千宏，田中義晴，平石浩之：モビリティ・マネジメント教育の長期的効果継続に関する実証分析－モビリティ・マネジメント実施 3 年後の意識調査より－，土木学会論文集 H, Vol.2, pp.45-53, 2010.
- 17) 平成 16・17 年度中央区研究奨励校 研究紀要：中央区立常盤小学校
- 18) 鈴木葉子：市民参加型計画におけるインセンティブ付与のあり方に関する研究，芝浦工業大学大学院工学研究科建設工学修士論文，2005.
- 19) 鈴木葉子：地域小学校の総合的な学習を通じたまちづくり～日本橋学生工房の活動を通じて～，土木計画学研究・講演集，CD-ROM, 2 pages, 2005.
- 20) 鈴木葉子，岩倉成志，野中康弘，市川健太：地域小学校の総合的な学習を通じたまちづくり授業のその後～生徒と保護者への 5 年後の追跡調査～，第 42 回土木計画学研究・講演集，CD-ROM, 2 pages, 2010.
- 21) 市川健太，鈴木葉子，岩倉成志，野中康弘：日本橋常盤小学校を対象としたまちづくり学習の授業効果の持続性，第 66 回年次学術講演会講演概要集 第 4 部，CD-ROM, 2 pages, 2011.

(2012. 10. 3 受付)

LONG-TERM EFFECTS OF COMMUNITY DESIGN LEARNING IN THE NIHONBASHI TOKIWA ELEMENTARY SCHOOL —RESULTS AFTER FIVE YEARS—

Yoko YAGINUMA, Kenta ICHIKAWA, Seiji IWAKURA and Yasuhiro NONAKA

The student organization which consists of multiple universities carried out community design learning for 50 school hours to the fifth-grade in the Nihonbashi Tokiwa elementary school in 2004. The continuous effects after five years of community design learning in 2004 were considered in this paper. Respondents to this panel survey were 19 students who took the coursework, their parents, 3 teachers and 8 senior class students who did not take the coursework at the time.

We obtained the following results: more than half students who took the coursework are interested in actual community design, outside cooperators, such as university students and local residents have increased the effect of this course work, long-term education for one specific community design proved to be effective and durable.